

弘大と八高専などセンサー開発

皮膚がん 早期診断可能

弘前大学、八戸工業高等専門学校、電子部品の製造販売を行うSEMITEC（本社東京都）は、共同研究により、皮膚がんの診断をする特殊な熱物性センサーを開発した。より早く正確に対象の温度を計測でき、皮膚に当てただけで患部を切除することなく早期のがん診断が可能となり、今後、医療機器への応用が期待される。

（西尾瑛）

温度計測 医療機器へ応用期待

弘大からは大学院理工学 参加した。研究科の岡部孝裕助教、八戸高専からは圓山重直校長、機械・工学コースの井関祐也准教授らが研究に



皮膚に当てることで早期がんの診断が期待できるセンサー（八戸高専提供）

とてその温度応答を高精度で計測し、早期がんの発見や進行度について切除なしでの診断が可能となった。特に、ほくろとの見極めが難しい初期のがん診断への期待は大きい。

弘大の岡部助教は「今後は臨床や実用化が課題」としつつ「表面温度を正確かつ簡単に測ることは実は難しい。今回、そこが可能になったことで、医療だけではなくさまざまな分野への応用も期待できる」と語った。八戸高専の井関准教授も「今回、さまざまな分野

の研究者が協力し社会に貢
行してしまふ可能性のある
できるのはうれしい。進
早期がんの発見が、誰も
のが目標」と話した。

センサーは、開発者
より現在特許出願中。

※この画像は当該ページに限って

陸奥新報社が利用を許諾したものです。

[問合せ先]弘前大学理工学研究科

E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp